

特別公開講座『地域に伝わる伝統芸能 神楽の魅力と課題』受講記

平成 29 年 10 月 14 日土曜日、学校法人文教大学学園の創立 90 周年記念事業として、2017 年度文教大学生生活科学研究所特別公開講座『地域に伝わる伝統芸能 神楽の魅力と課題』が開講した。ここでは、この講座一日目の内容と、使用されたテキストの内容について振り返りたい。あわせて、平成 28 年 9 月に開催された「第 9 回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」資料について触れたいと考える。

今回の講座では、講師による講義と、神奈川県厚木市酒井の相模里神楽、垣澤社中の皆様による実演が同日のうちに行われた。

前半の講義では「伝統芸能・神楽の歴史と現代における意義と課題」として、まずは民俗芸能として今見られる神楽の概要や現状が整理されていった。数は多くないものの特に神楽好きの人間がおり、芸能として楽しまれている状況がある。綿々と受け継がれ、また分岐し、異なる発展を遂げもする。この流れは神楽と聞いてイメージしやすい部分であり、神楽、または伝統芸能について興味の度合いも様々な参加者の認識の確認を行っていたように感じた。丁寧に解説のある神楽公演に参加したことなどがあれば、耳にしたことがあるかもしれない。一方で、これまで神楽に触れて来なかった聞き手がいても、まずは知識として神楽を知ることが出来る。会場全体の神楽への姿勢を整える時間、といった印象であった。

この後、講義内容は神楽の経てきた歴史や、各時代において求められて来た役割、その役割により起こった変容へと進んでゆく。神楽は人々、神社、国から何を求められたのか。それぞれの要求に対し、神楽はどのように応え、どの部分を変え、どのような存在になったのか。伝統芸能として記録に残されながらも、祈願や人々の娯楽としては印象が薄れた様子、それでも東日本大震災後の現代において、タマフリやタマシズメの役割を担う、人々の願いに寄り添う様子。しかし一方では、戦時中、出征の無事を祈るものとして神社で行われることにより、国策に利用されてきた側面も見える。それぞれの時代、場面で求められるものは変化し、それに対応して様々な在り方を受容し、今、神楽は受け継がれている、ということが個々の事例によって印象付けられる。

この後に示された「神楽については厳密な定義を用意して演繹的に話すことは難しく、色々な神楽に出会うことになるから、ゆっくり、いわば帰納的にゆっくりと理解するしかない」という考え方は、ただ芸能として神楽を楽しむことがあっても、あるいは神事として祈りをのせる神楽に立ち会うことがあっても、そこで自然に達する考え方ではなく、講座と言う形式で神楽にアプローチするからこそ投げられた、観客それぞれへの課題であると感じた。

講座参加者の中には神楽初心者もあれば、知識経験その他様々な面から神楽の玄人（くろうと）であろう方もいたのだろうと考えられる。神楽に対する経験、知識、あるいは人生経験、どれをとってもバラバラで、大教室まるごと、様々な数百人単位の人間が、それまで自分の中に持っていた神楽のイメージを拡大し、異なる面、異なる性格を見つける機

会を得る。これは、とても珍しい場なのではないか。そして、この場で前述の課題が投げかけられたことは、受講者それぞれが、各々の段階に応じて、満遍なく考えさせられる、興味深いものだっただろう、という印象を持った。

これ以降、講座は神楽の神降しなど、儀礼的、儀式的側面と、それを人々に伝える役割から強まっていった芸術的側面に着目してゆく。時代や国家政策、奉納先・開催主としての神社、受け取り手の人々との関係と、神楽の有するいくつもの性質が示され、講座受講者が持っていたかもしれない「古くから伝わる不変の伝統芸能」といったイメージを払拭する。

これまで神楽を鑑賞する際に私が感じていたのは、まずは神楽が「絶対のもの」としてあり、これを理解するためには経験やその世界観に関する知識、または地域のしきたりのような漠然としたものが必要である、というような小さな壁とも言えるものであった。

目の前で繰り広げられる神楽について、彼らが何を言っているのか、今何をしているのか、などの細かい説明を求められるような雰囲気は、様々な要因によるものとは理解されるが、実際の「神楽の現場」にあっては、多くの場合、おうした問いは存在しない。伝統的な芸能であり神事であるところの神楽に対し、そのような野暮なことは問わない、求めないとも言うような、尊敬を含み、それと同時に隔たってしまう距離感というような空気感があるように思われる。伝統芸能というイメージが絶対的な存在であるが故に生じる、有体に言えば取っ付きにくい距離感である。

しかし講座内では、神楽の持つ、存外に変容を経た経歴が示される。絶対的存在という漠然とした壁が取り払われた後には、受講者に向けて構造を明らかにするように、舞踊譜や楽譜が示されての実演の時間が設けられる。神社でも通常の公演でも、神楽を説明書付きで眺める機会はそうそう無いだろう。

舞踊譜などは、元々は存在していなかったものを、講座に向けて態々作成して下さったものだという。講義の中の一部として取り扱うものであるにも関わらず、新しい試みとしてあるこの舞踊譜は、とても的確に効果的に、神楽と受講者の関係性を確実に理論的なものとしたように感じた。これを置いて実演をいただくことで、舞い手の動きと舞台上の位置取り、繰り返される動きなどが図示される。直ちに神楽を理解する、意味が分かるというような事は起こらない。しかし、一步離れて鑑賞する対象から、理解しようとしても良い、動きや意味を考えながら接しても良い、臆することなく接することが出来る対象となる。

テキストにまとめられたこれら神楽資料部分の情報量の充実は、舞い手である垣澤社中のご尽力による部分が大きい。このことは、ただこの講座を充実させるに止まらない役割を持つと考えられる。人から人が受け継ぐ芸能であるという事は、その歴史の裏付けとなる一方、普遍的な記録や伝承が成されない可能性を十分に有する。一方で、受け継がれるということ自体もまた、ひとつのアイデンティティでもある。この流れの中で、講座テキストという目的を持ち、伝承者ではなく鑑賞者のために作られた資料群の意義はとても大

きい。

はっきりとした目的のもと、手間も時間も莫大な量を必要とする作業に違いないことも含め、通常であれば取り組まれないであろう試みが成されている。大抵の神楽関係資料において、舞台上の動きなどを追っているものは、鑑賞者である研究者の手による成果ではないだろうか。舞い手・演者自らが自分たちの持つ神楽を資料化するという動き自体、講座としての神楽という、珍しい場が成し遂げたものだろう。

今回の講座において大きな存在は、やはり実演をいただき、それに止まらず上にあげたように多大なる尽力をいただいている垣澤社中の皆さまである。この垣澤社中について、今回の講座以前からの資料が存在する。『楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演』として舞台会場で行われてきた神楽公演解説プログラムである。

この第9回神楽公演開催において出演いただいたのが垣澤社中であり、公演パンフレットでは『垣澤社中の民俗誌』として様々な視点からの記述が成されている。家元によって語られる社中や神楽の現在について、垣澤社中に入って神楽を舞う人々について、神楽衣装について、お囃子について、舞いや踊りについて他、社中の当人の言を多分に交えつつ、資料として、また読み物としてもしっかりと作りとなっている。神楽面についてもカラー写真を多用して紹介され、こちらもわかりやすく、同時に接しやすい形式に在るにもかかわらずやはり貴重な資料と言える。

これらの資料についても、他で目にするのが少ない。かつ、神楽への興味だけで誰もが到達するには深く、貴重なものである。聞き手と社中の距離感が近くあるからこそ、と思わざるを得ない内容とボリュームであり、ただ神楽を見に行った観客として得られるものではない。語り部としての社中と聞き手が、互いにしっかりと腰を据えて関係を築き、信頼関係を構築し、時間をかけて築き上げて来たことがうかがえる。その成果を、神楽公演のパンフレットとして提供していた前述の公演は、今回の講座のように直接的ではないにしろ、観客各々の神楽の捉え方に強く働きかけるものであったように思う。

このように伝承母体である社中を丁寧に記録した公演解説プログラムがあり、本講座資料では、同じ社中による演目を中心として、様々な手法で記録が成されている。2年に渡って整理された二つのテキストは、それぞれの視点と目的からひとつの社中を捉えた一連の記録となっている。資料として貴重であることはもちろん、これらが公演、講義として広く提供され、記録対象である社中自らもまた出演し、実演や解説を行っている。

資料としての充実に加え、この社中の積極的、能動的な関わりは、ただ記録される対象ではなく、自らを観客に理解させる意思を持っている。この協力体制も稀有なものであり、情報の受け取り手からすればこの上ない厚遇となっている。

神楽を鑑賞することは、楽しい。趣深く、面白い。しかし、では神楽とは何だろうか、と一歩踏み込みたいと思うとき、一人の観客がその答えを探すのは難しい。このタイミングで、多角的に特定の神楽集団について語り、まとめられた一連の資料に触れることが出来る。この事は、観客の神楽への理解を深めると同時に、神楽を知る、講義内では帰納的

に捉えると呼ばれたが、その試みのため、ひとつのフレームを与えてくれていると感じる。ただ楽しむ観客の段階から、神楽を知ってゆく、理解し考えて行くためのヒントが示されている。

今回の講義では、神楽を知るためのまず初めの知識、姿勢、手法などが示され、神楽について全くの初心者でも、理論的に示された資料と解説、実演により、気後れすることなく神楽を感じ、考えることが出来たように思う。今後、神楽に触れる機会を持つだろう各々に対して、大きな影響を与え、その経験蓄積の一助となったに違いない。

しかし、私はこの講義について、特に大きく影響を与えられたのは、むしろこれまでに神楽についてある程度の経験を積んできた、何かしら神楽のイメージや知識を持っていた方々なのだろうと感じた。

講義では、多くの人間に同時に等しく情報が与えられる。これにより、自分の思う自らの知識レベル等に左右されず、そもそもの認識、一からの知識、他たくさんの普段ならば経験ゆえに見過ごしてしまいがちな部分について、改めて知り、考える機会が与えられた。このことは、講義形式ならではの効果だろう。そしてまた、より深い、詳細な記録については、講座テキストや公演パンフレットなど、手厚い資料が用意されている。

この講義は、神楽を扱いその知識を与える、ということにとどまらず、受講者それぞれの神楽観に一石を投じ、今後の神楽へ接し方について大きく影響を与えたと考えられる。神楽をテーマとした講義を行ったということ、実技を含めた講義の形式、新たな挑戦を含む講義資料、開かれた講座であったが故の幅広い受講者、このすべての要素について、神楽を好む人にとっても、神楽を研究する視点から見ても、少なからず意味を持つものとなっただろう。

講義の内容の充実はもちろんのこと、この試みを実現されたことについて、垣澤社中の皆様や文教大学関係者の皆様、学生スタッフに心から感謝したい。また、受講者各々が、今後それぞれの姿勢で神楽と向き合っゆくであろうことを楽しみにしている。

(K.M さん・埼玉県児玉郡神川町在住)